



いとう



海援隊旗(二曳きの旗)

<http://www.ryoma-kinenkan.jp>

泰然 TAIZEN JIJYAKU 自若

新年明けましておめでとうございます

ここは館長の部屋

## 開館30周年の節目に寄せて

高知県立坂本龍馬記念館は、本年11月15日に開館30周年の記念すべき日を迎えることができました。これもひとえに、国内外の龍馬ファンや来館者の方々、地元の皆様、企業・団体・自治体・文化施設、そして歴代館長やご家族をはじめ、当館の誕生とその後成長をお支えくださった多くの関係の皆様方のご支援、ご厚情の賜物であると感謝の気持ちでいっぱいです。

昭和59年に県内12の青年団体委員を組織され、これを契機に当館創設のための「龍馬募金活動」が始まりました。

そして、国内外の方々の浄財と高知県・高知市の財政的支援を得て、当館は、30年前の平成3年11月15日に誕生いたしました。おかげさまで平成30年4月には2館体制となりました。

第5波のコロナ感染が収束の方向に向かっていきますので、開館記念日の11月15日には、当館ホールにて記念式典を開催することができました。式典には、濱田高知県知事、加藤高知県議会議長、岡崎高知市長、西森高知市議会議長の皆様や、当時の高知商工会議所青年部筆頭副会長として龍馬募金活動を牽引された、現在全国龍馬社中の代表理事である橋本邦健様、地元の皆様、そして歴代館長やご家族と、企業・団体・文化施設の方々をはじめとする、当館の誕

生とその後の成長をご支援くださった関係の方々をお迎えしました。

式典では、知事、市長、両副議長様よりごあいさつを賜りご参会の皆様とともに30周年の節目を祝いますとともに、3名の歴代館長様への知事感謝状の贈呈や、当館の活動をお支えいただいた2つの団体様から記念品を頂戴するなどのセレモニーを執り行わせていただきました。

初代館長の小椋克己様には、創館当初から、「龍馬への入口」としての記念館にふさわしい環境づくりに、第2代の森健志郎様には、「龍馬の殿堂」としてのスタイルづくりにご尽力を賜りました。そして第3

代の高松清之様には、歴代館長様の事績を引き継ぎながら、博物館仕様の新館づくりにご尽力を賜ったところでした。

加えて、JT・JR・日本旅行・JTB各社様の企業龍馬会様や、坂本龍馬倶楽部様からは、それぞれ、龍馬の好きな「梅の木」(品種名「おもしろいまま」と、30年前に青年1,300名の実行委員会に記された、第1号館(現「本館」)寄贈時の「メッセージ・コメント」を寄贈していただきました。

歴代館長様のお気遣いと、各企業龍馬会様、坂本龍馬倶楽部

様のお心遣いに、あらためまして心からの感謝を申し上げます。

これからも当館は、多くの国内外のファンや、関係各位の皆様方の温かいお支えのもと、「龍馬への入口」、「龍馬の殿堂」、そして「歴史文化・歴史観光の振興拠点」として前進していくことを、お誓いをしたいと考えております。

今後とも、この努力を職員一同力を合わせて重ねてまいりますので、皆様方引き続きのご指導、ご鞭撻を賜りますよう、本年も何卒よろしくお願ひ申し上げます。

吉村大



# 開館30周年記念

## 特別展「龍馬と北の大地」第2部 北海道で「龍馬」生きる―チヨッコウさん再び

「反骨の農民画家・坂本直行」展から15年  
4月3日まで(2月7〜9日は展示替えのため閉室)

### スタート

「龍馬と北の大地」は、昨年12月16日に第2部が始まり、舞台は蝦夷地から松浦武四郎が名付けた北海道へと移りました。

15年前(2006年)半年近くにわたり、「反骨の農民画家 坂本直行」展を開催したことをご記憶の方もいらっしゃると思います。記念館開館15周年、直行生誕100年の年で、年間入館者数を押し上げただけでなく、入館者の過半数を県民の皆さんが占めました。終了後の「もう一度チヨッコウさんの絵を見たい」という声に後押しされて、15年ぶりの開催です。

坂本直行は原野の開拓農民です。10代から山に登り、山にあこがれ、そこに咲く花々を愛しました。出会った山の風景や花々をペン画や版画、水彩油彩画などで多く残しています。資産家で名士でもあった父の期待に真っ向から反発し、裸一貫で道東十勝の原野で開拓農民として30年を過ごした直行。それは厳しい自然への憧憬と挑戦、開拓との闘いという過酷な時間でした。その傍ら、描き続けた山々や花々。開墾の鉞と共に捨てることのない絵画への執着は、厳しい開拓生活ゆえの衝動でもあったでしょう。画家に転じ、山岳画家と称される人ではありますが、反骨の農民画家というのがふさわしいと思います。

農民である誇りと、農民運動を通じた反骨。しかし、その生き様に私たちは「龍馬」の姿を見ることができません。

第2部での展示の始まりは、『海援隊約規』(慶応3年4月)。龍馬が掲げた海援隊における事業の一つが開拓事業です。この約規(規則)も、子孫に伝わったものです。改めてじっくりご覧いただきたいと思います。



33歳の直行=1940年、開拓原野で(北大山岳館所蔵)

坂本直行(1906〜1982)は、裕福な資産家の息子として釧路で生まれました。婿養子で熊本出身の父弥太郎と、直寛の長女直意の次男として育ちます。北海道大学卒業後、自分は自

分の道を行くと父の猛反対を押し切り、道東十勝の原野に向かい、それから30年間、厳酷の開拓農民として生きた人です。のちに坂本龍馬の実家・郷土坂本家8代目となりますが、家長制への反発もあつたようで、一切龍馬を語らなかつた人です。

直行は開拓の実践者として、図らずも龍馬の志に近い人生ではなかつたかと思われませす。

龍馬の遺族たちは、明治31(1898)年に北海道へ渡りました。渡道の先導は直行の祖父坂本直寛(1853〜1911)。家族6人ではるばる石狩川のほとり樺戸郡浦臼町へ移住しました。

高知から遠く北海道へ渡る弟家族を見送った兄の坂本直(1842〜98)は、その半年後に病没。夫であり父を亡くした直の妻子もまた浦臼へと渡っていきました。直は元海援隊士・高松太郎で、朝廷の意向により叔父の坂本龍馬家を継いだ人です。それから120年余り経った今、子孫たちは北海道の地にしっかりと根づかれています。

会場には、直行が愛し描き続けた、日高山脈の山なみと裾野に広がる柏林という代表的な構図の油彩画を中心に、厳しい冬を超えて咲くかれんな花々の水彩画など、北海道各地から集めて展示しています。

直行が描く日高山脈と柏林は、現在では見ることのできない原始の風景です。開拓農民から画家となつて原野を離れても、直行は日高と原野の風景を描き続けました。

子どもの頃から絵を愛し、亡くなるまで描



初冬の日高連峰



晩秋の原野と柏林と白樺

(六花亭所蔵)



かたくり



はまなし

前田 由紀枝

き続けた直行。渴望するほどの絵心は、やがて落ち着いた心境、老境へと移っていきます。同じ風景でも年代を追うと、わずかな構成の違いに、直行の心映えの変化が見えてくるはずですよ。

直行はなおゆきと読むのが正しいのですが、家族はじめ友人知人はチヨッコウさんと呼びます。いごっそうチヨッコウさんを再びご紹介します。開拓農民チヨッコウの世界をご堪能ください。

本展では、北海道内の六花亭(帯広市)、帯広百年記念館(同)、十勝毎日新聞社(同)、広尾町海洋博物館(広尾郡)、北大山岳館(札幌市)をはじめ弘松家や個人の方たちにご協力いただきました。関係の皆様方には心より感謝申し上げます。

# 特別展「龍馬と北の大地」第1部 蝦夷地へのまなざし―龍馬と幕末の志士

## 終了

10月5日に始まった特別展「龍馬と北の大地」第1部「蝦夷地へのまなざし―龍馬と幕末の志士」が、12月3日に終了した。あつという間の60日間だったが、特に会期中の盤以降は多くの来館者を迎えることができた。今回の展示を振り返りたい。

### 松浦武四郎と松阪市

本展は、松浦武四郎・北添借磨・坂本龍馬の3人をキーパーソンに構成したが、そのなかでもやはり中心となったのが松浦武四郎である。展示資料の多くを松浦武四郎記念館（三重県松阪市）から借用した関係で、松浦武四郎関係資料が大部分を占めたことがその主な要因であったことは間違いないが、資料の量の問題というよりはむしろ松浦武四郎という幕末維新史に金字塔を打ち立てた人物が放つ圧倒的なオーラに展示室が支配されたと言うべきかもしれない。このような感覚を持った観覧者も少なくなかったのではないだろうか。高知県ではじめて本格的に、松浦武四郎の事績を実物資料によって紹介できたことに、大きな喜びを感じている。

本展では、松阪市の複数の施設から資料を借用した。前記の松浦武四郎記念館に加え、本居宣長記念館、そして松阪の豪商の屋敷に由来する旧長谷川治郎兵衛

家（NPO法人松阪歴史文化舎）も、同じ松阪市内にあって貴重な武四郎関係資料を所蔵されており、その貸し出しをご快諾いただいた。また、特別後援をいただいた松阪市からは、惜しみないご協力とご声援を頂戴し、まさに特別後援を賜ったと感じている。改めて、ここに深甚なる謝意を申し上げたい。

### 新たな北添借磨像

松浦武四郎関係資料が軸になったとは言いつつ、土佐藩出身の志士である北添借磨についても、新たな人物像が提示できたのではないかと考えている。従来どうしても龍馬が主、借磨が従の関係になりがちであったところに、今回借磨を蝦夷地を目指した龍馬の先人として明確に位置づけることができた。同じ松浦武四郎のフォロワーではあったとしても、実際に北の大地を踏み、武四郎と交流するなど、借磨は龍馬が実現できなかったことをいくつも成し遂げている。知識や経験の面で、一歩も二歩も先を行っていたことは間違いない。関係資料が限られるなか、一人の志士の紹介としては難しい部分もあったが、観覧者それぞれが新たな借磨像を発見していただいたのではないだろうか。重要な土佐藩出身の志士の一人として、今後、借磨の魅力あふれる人柄と活動にさらにスポットが当たることを期待したい。

### 会期中の新知見

会期が始まってからも、展示担当者として多くのことを学んだ。来館者も興味を引かれたのであろう、多くの質問や意見を頂戴した。そのなかのとある質問がきっかけとなり、次のような新たな知見が得られた。事前に展示解説に加えられなかったことは残念だが、この場を借りて報告したい。

実物の展示には至らなかったが、海援隊の雑記帳「雄魂姓名録」という資料の写真をパネルと図録に掲載した。そのなかにある「蝦夷并二北蝦（北蝦夷）樺太のこと」廻路用意ノ道具（ルビ・括弧内は筆者が加えた）と題する一節を紹介したものである。内容は、松浦武四郎の人物評を簡潔に述べた後に、表題の通り蝦夷地を巡るために必要な道具類を箇条書きで紹介している。道具類を列挙するこの文章では、箱館奉行の役人である向山源太夫の名が出て、それが主語になるなど、現地での何らかの記録の写しであることは明らかだったが、準備中、この点について特に疑問を持つことはなかった。ところが、会期中に心当たりをいくつか調べたところ、ちょうど実物を展示していた松浦武四郎の著書『北蝦夷余誌』（「東西蝦夷山川地理取調日誌」のうちの1冊）に、「雄魂姓名録」とまったくの同文が見つかったのである。「雄魂姓名録」のこの一節が、『北蝦夷余誌』を書き写したものであることは間違いない。推測するに、龍馬あるいは海援隊士の誰かが、武四郎が出版した『北蝦夷余誌』を持って、そうでなくともそれを借りて読んだ可能性が非常に高い、と言えるだろう。龍馬と武四郎は、我々が思うよりもつ

と近い関係にあったのかもしれない。今回の展示は終了したが、今後も注視していきたい課題である。

高山嘉明



初展示となった河田左久馬宛の龍馬書簡(常設展示室)



展示風景(企画展示室)

# 30周年記念行事、無事に終了しました!

一昨年度末から猛威をふるうコロナ禍に翻弄される日々ではありましたが、11月15日、なんとか無事に当館は開館30周年を迎えることができました。今年度は、開催する企画展・特別展すべてに「開館30周年」の冠をつけ開催するなど、年度当初から30周年を盛り上げて、その最後の事業として11月15日に開館記念式典を執り行いました。式典以外にも11月はいくつかの記念行事を行いましたので、ここでご報告いたします。

## ◆11月13日(土)

### 記念シンポジウム「龍馬の魅力」

(於ザクラウンパレス新阪急高知)  
NHK大河ドラマ「龍馬伝」プロデューサーの土屋勝裕さん(NHK編成局編成センター副部長)と令和2年度龍馬賞を受賞された元阪神タイガース投手の藤川球児さん(関西・高知スポーツ観光大使)をお迎えし、記念シンポジウムを開催いたしました。土屋勝裕さんによる「『龍馬伝』と『エール』を振り返る」と題した講演の後、お二人と当館の三浦学芸員の3人によるパネルディスカッションを行いました。

「チーム」「信用・信頼」「観客・視聴者・来館者」など3つのテーマに沿い、それぞれについて龍馬のエピソードなどを紹介しながら、土屋さんと藤川さんにもお話をいただきました。投球同様に熱い藤川さんのメッセージやドラマ作りの裏側が見える土屋さんの貴重なお話などを、来場された方は熱心に聞いておられました。



記念シンポジウム(11月13日、左から司会・谷本美尋さん、土屋勝裕さん、藤川球児さん、三浦)

## ◆11月14日(日)

### 恒例の「龍馬まつりin記念館」。

新型コロナウイルス感染症流行防止のため、長宗我部鉄砲隊の公開訓練(甲冑着用)や無双直伝英信流居合術演武な

ど野外でのイベントを行いました。また、30周年記念として、今年は龍馬まつりも入館無料!(例年は開館記念日のみです。)



無双直伝英信流居合術演武(11月14日)

## ◆11月15日(月)

### いよいよ開館記念日。

9時の開館に先立ち、記念式典を開催し、過去3代の館長への感謝状贈呈などを行いました。その他、開館30周年にあわせ、関係者の皆様から記念植樹(梅「おもいのまま」)、記念モニュメント(本館出口)のご寄贈もいただきました。30分の短い時間でしたが、この式典においても30周年の節目を祝しますとともに更に前進していくことをお誓いすることができました。

30周年の年は、恙なく...とは言いがたい状況となりましたが、坂本龍馬の業績を未来に伝えていく使命を忘れず、次の40周年に向かって、歩んでいきたいと思っておりますので、引き続きご支援いただきますようよろしくお願いいたします。

河村章代



記念式典(11月15日、歴代館長へ濱田省司高知県知事より感謝状贈呈)



記念植樹



記念モニュメント

# 龍馬の手紙

13

良林及海中の品類よき  
ものを得ハ人をうつし  
万物の時を得るよろこひ  
(慶応三年三月六日、印藤聿宛)

龍馬は「良林及び海中の品類よきもの」を得るために「エゾ」などに移民を想定していたようだ。ここでは、特に近代の北海道十勝地方を事例に、「良林」や「海中の品類」の生産出荷について触れる。

「良林」は開拓時代にいち早く注目された産物である。十勝の森林地帯は、早くはマッチの軸木となるドロノキや、皮なめしに使うタンニンを豊富に含むカシワが注目された。のちには鉄道の枕木や製紙用材、建築用材などとして「良林」が切り開かれてゆく。ただし、こうした事業が本格化するのには明治30年代以降昭和初期に至るまでの鉄道の敷設を待たなくてはならない。

十勝の「海中の品類」は、近世以来塩漬けの鮭や昆布などが産物に数えられた。港湾を設け、漁業が機械化し、動力船や冷蔵施設が現れるのは昭和の初期である。機械化を経て、北海道の海産物は新しい次元で遠隔地の食卓に届けられるようになる。

こうした産業の興隆には人々の情熱が不可欠だ。十勝の各地域では、明治時代のなごころから数十年単位の請願を繰り返して鉄道や港湾を誘致した。こうした地域からのうねりの中に、あるいはうねりに呼応する者の中に坂本龍馬がいたら、と想像してみたくなる。ただ私は歴史を研究する者として「たら」「れば」はあまり考えない。逆さまに、龍馬の発想や精神が開拓者に受け継がれた可能性を考える。

開拓者の中にはもと士族の者がいた。自由民権運動を経て北地へ赴いた者もいた。彼らに限らずとも、幕末の時代経験を肌で感じた人々がいた。「良林」や「海中の品類」を産業としようとした人々の心性に、龍馬や龍馬が生きた時代のエッセンスが含まれていただろうことを想像しながら、残された記録をこれからも読み進めたい。

大和田努(帯広百年記念館学芸員)

私の  
おすすめ

No.13

## ジョン万次郎展示室

『高知出身、幕末期のグローバル人材』

今回ご紹介するのは、坂本龍馬記念館新館2階にあるジョン万次郎展示室です。万次郎は遭難中にアメリカの捕鯨船に救出されたのち10年間の大半を捕鯨船員として、また数年をアメリカ本国で過ごし帰国。以後日本の近代化に大きく貢献した人物です。万次郎と龍馬は直接面識がなかったであろうと言われるものの、「漂異紀略」(河田小龍が万次郎から海外事情を聞き取りまとめた書物)等を通じて、龍馬が世界へと開眼する後押しをした人物の一人だと考えられます。

展示室内の左手には、大きな世界地図があり、地図上のカラフルな矢印は万次郎が生涯旅したおおよその道筋を示しています。翻訳や連絡手段となるインターネットもないこの時代に、それぞれの地で万次郎がどのような問題に直面し、乗り越えてきたのか、想像してみるのも楽しい

でしょう。展示室内の右手には、アメリカで万次郎を支えた人々が記した英文書籍の展示や、万次郎が船上で見聞きし学び、のちに自著にもなった英語文が紹介されており、常設展示室とは一味違うグローバルな雰囲気を感じられます。当時、鎖国や尊皇攘夷の広がり等、諸外国との関わりを避けるべきとする世の動きがありました。その渦中で10年という月日を異文化に採まれ過ごし、決死の覚悟で帰国した万次郎の強靱さと、行く先々で慕われ信頼された人間性、そして自らの経験をよりよい国づくりへと捧げた彼の功績を、ぜひ当館ジョン万次郎展示室にてご覧ください。

渡辺 美月



ジョン万次郎展示室 壁面

事の発端は、当館の常設展示室で何気なく展示ケースの状態を確認していた時のこと。ケースのなかの展示資料が、奇妙な違和感を伴って視界に入った。それまで何度も見ていたはずのその資料は、『和英通韻伊呂波便覧』という、海援隊名義で出版された英語のテキストである。その時展示していたのは、十二支の動物が英語で紹介される見開きページである。英語のスペルの上部に、発音を示す日本語表記があり、また、十二支それぞれの漢字にもルビが振られる。この出版物の性格を考えれば、英語が主役であることは

「子」という文字は、カタカナである。——と言ったら驚かれるだろうか。正確には、「子」という文字は、かつてカタカナでもあった、と言つべきであるが。今回、日常業務においてふと気になった「子」という文字について、若干の考察を試みたい。筆者が疎い言語学や日本文学の分野からすれば拙い内容にとどまると思われるが、歴史学の分野からの雑感ということで、ご容赦いただきたい。

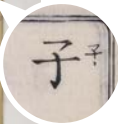
読み仮名に「子」?

言うまでもないが、その時筆者が違和感を覚えたのは、日本語の部分である。

それらを抜き出して列挙すれば、「子」「丑」「寅」「卯」「辰」「巳」「午」「未」「申」「酉」「戌」「亥」——十二支をあらわす漢字としては何の変哲もない、お馴染みのものだろう。が、問題は最初の「子」の表記である。



和英通韻伊呂波便覧



きつと多くの方が、筆者と違和感を共有してくださることだろう。まず、大きな文字が漢字の「子」であることは間違いない。そして、その右側に付く小さな文字は、他の11例と対照すれば、その読みをあらわすものと判断できる。これも、文字としては「子」と読める。つまり、親文字(漢字)も「子」、ルビ(読み仮名)も「子」と表記されているのである。

もうお分かりだろうが、小さな文字の正体は、(ね)の音を持つカタカナである。もちろん、「子」が(ね)と読む仮名であり、それが江戸時代の文章に頻出することは、広く知られるところである。しかし、このような知識があったとしても、それでもやはり「子」などという表記は、少なくとも現代人の感覚とはかけ離れているように思う。

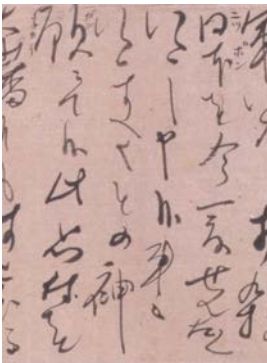
歴史のなかの仮名

歴史的に、いわゆる変体仮名(漢字がくずれて仮名となった文字)に豊富な種類があることはよく知られているが、一方、カタカナについては、一音につき一字が原則で、しかも字形は現行のそれとほぼ変わらない。その点、(ね)の音を持つカタカナは特殊である。『日本国語大辞典(小学館)の「ね」の項目に、次のような説明がある。「ね」の字形は、「禰」の略体「禰」の草体から出た。「ネ」の字形は同じく「禰」の左部分をとったものである。なお、明治時代までは、かたかなとして「子」から出た「子」が多く用いられた(傍線筆者、以下同じ)と。少し分りにくいかもしれないが、要するに漢字「子」の草書体が、(ね)の音を持つカタカナとして明治時代まで存在、しかも別のカタカナ「ネ」と共存したということである。なお、筆者のごく狭い見識ではあるが、江戸時代、(ね)の音を表すカタカナとして、「ネ」の表記はほとんど用いられなかったように思われる。少なくとも、筆者がこのことに興味を持って以降確認できたものは、すべて「子」の表記であった。「ネ」もおそらく皆無ではないのだろうが、圧倒的に「子」が優勢であった点は指摘しなければならぬ。話を戻すと、カタカナ「子」は、先の『日本国語大辞典』の説明のように、草書体であることによつて漢字との見分けが可能なのか。古文書解読の必携書と言うべき『くずし字用例辞典』(見玉幸多編、東京堂出版)の漢字「子」の項目では、「子はそのままの形でカタカナのネにも用いられた」と説明される。これがより現実的な用法であったように思う。実際にカタカナとして使われる「子」の字は、草書体ではなく楷書体(漢字と同様の直線的な字形)で書かれることが多いように感じる。冒頭に紹介した、幕末の出版物『和英通韻伊呂波便覧』におけるカタ

カナ「子」の字形も、草書体とは言い難い、むしろ漢字と同形である。なお、前掲『くずし字用例辞典』の「かな編」によると、漢字「子」は変体仮名の字母(仮名の元となった漢字)でもあり、これを字母とする変体仮名として、(し) および(ね)の音を持つものがある。和歌等に触れる機会の少ない筆者には馴染みがないが、変体仮名として書かれる場合、「子」をくずした草書体となるのである。

龍馬のカタカナの使い方

ところで、龍馬はカタカナ「子」を使っていたのかという点にも興味を湧いた。龍馬の手紙を通覧すると、有名な「せんたく」の手紙(文久3年6月29日、姉乙女宛)に、その用例が確認される。姉が読みづらいと考えたのか、龍馬はこの手紙で多くの漢字にルビを振っている。まず、もつとも有名な「日本を今一度せんたくいたし申候事二いたすべくとの神願にて候」とある一節である。



坂本龍馬書簡  
文久3年6月29日乙女宛(部分)

「日本」に「ニッポン」のルビが振られるのはよく知られているが、龍馬はまた「神願」の「願」の右傍に「ガン」、左傍に「子カイ」という仮名文字を付す。右が読み仮名、左はやや特殊な用法で漢字の意味を示したものである。また、その少し先には、「兼而」の字句に「カ子テ」のルビが見られる。

この2例では、もちろん「子」をカタカナとして「ね」と読む必要がある。読みとしては、前者が「へねがい」、後者が「かかね」となる。なお、『龍馬の手紙』(宮地佐一郎編、講談社)をはじめ龍馬書簡を翻刻した書籍等では、このカタカナ「子」を、便宜的に現代の仮名遣いである「ネ」に改めるのが普通である。当館の展示解説もその例に漏れない。読者の便宜を図るための当然の配慮と言ふべきだが、それによって原文の特徴が失われていることにも少し注意したいところである。

カタカナであることにこだわらず「ね」の音を持つ仮名文字を他に探せば、同じ「せんたく」の手紙に、あと2か所、別の例が確認できる。手紙の中盤に「せひよまねはいかんぞよ」(傍点筆者、以下同じ)、そして後半に「おろんともたぬよふこならね、ハ中々こすいいやなやつで死ハせぬ」とあるのがそれである。

書かれるのは、どちらもひらがな(「祢」がくずれた変体仮名)の「ね」である。龍馬の手紙には、ルビのみならず、本文にも多くのカタカナが登場するが、「ね」の音をあらわす仮名文字がルビではなく本文に書かれる場合、例外なく――筆者の見落としがあるかもしれないが――ひらがな(変体仮名)の「ね」となる。先に示した「ねハ」(「ねば」)の表記は、直後「ハ」につながるにもかかわらず、「子」や「ネ」ではなく、やはり「ね」となるのである。本文にはひらがな「ね」を書き、ルビにはカタカナ「子」を書く、これが龍馬の「ね」の音の使い方であったと一応まとめられそうである。

このような仮名の使い分けは、龍馬に限った話ではなく、当時のごく一般的な用法だろう。そもそもカタカナは、漢文に付す訓点(和文読みするための符号)として発生したと言われるように、「音」を表記するのに優れた文字である。漢字の読みを示すためにカタカナを使った龍馬の用法も、その範疇にあると言える。「ネ」ではなく「子」を書いたのも、それが龍馬にとっての常識だったからだろう。それほど、カタカナ「子」が市民権を得ていた表れと理解しておきたい。

### カタカナ「子」の終焉

これほどまでに普及していたカタカナ「子」は、なぜ使われなくなったのだろうか。ひとつの答えが、明治33(1900)年の「小学校令施行規則」にある。その第16条に「小学校ニ於テ教授ニ用フル仮名及其ノ字体ハ第一号表(中略)ニ依リ又漢字ハ成ルヘク其ノ数ヲ節減シテ応用広キモノヲ選フヘシ」とある(文部省編『小学校令・小学校令施行規則・小学校令改正ノ要旨及其施行上注意要項』明治33年発行カ、国立国会図書館デジタルコレクション参照、ルビは筆者による)。そして、「第一号表」には、「ね」の音を持つカタカナとして「ネ」の一字が示される。

第一号表	第二号表
平假名 あいうえお かきくけこ さしすせそ たちつと なにぬねの はひふへほ まみなも やいゆえよ	片假名 アイウエオ カキクケコ サシスセソ タチツト ナニヌネノ ハヒフヘホ マミナモ ヤイユエヨ
平假名 らりるれろ わみゆを ん ざしずせぞ たちつと はひふへほ まみなも	片假名 ラリレロ ワミユエ ン ガキクゲコ ガシズゼゾ ガチツト ガヒフヘホ ガミナモ

文部省編『小学校令施行規則(小学校令改正ノ要旨及其施行上注意要項)』より、国立国会図書館デジタルコレクション

このような国による統一が、ひらがな・カタカナが「音につき一字である」という、現代的感觉の出発点となった。「小学校令施行規則」については、ひらがなの統一(変体仮名の廃止)の面がよく知られるが、同時にその裏で、カタカナ

「子」もひそかに「非公式」の烙印を押されたのである。余談ながら、この時も「ネ」ではなく「子」が公式のカタカナに指定されていたれば、漢字「子」とは少し字形の異なる活字が、カタカナのひとつとして現代社会に存在していたことだろう。

当館の展示の柱である龍馬の手紙には、多くの仮名文字が書かれている。龍馬の筆跡を実際に観覧する機会があれば、その使い方にも注目していただければと思う。

### 新職員紹介



9月より坂本龍馬記念館の受付業務をすることになりました山下と申します。

前職は、高知県の青果物に係わることに携わっておりました。全く異なる業界で戸惑いながらも早いもので3カ月が過ぎました。受付業務では、いろんな情報を共有しながら一つのチームで仕事をしています。一番大事なものは「ガッツ」で日々、体力勝負です。目標は、龍馬が懸命に動いたことを自分なりに描きながら3つの目標をたてました。

素直に学ぶこと。勉強し続けること。何事にも恐れず柔軟性を持ってチャレンジすることです。仕事、プライベートにおいてもチャレンジし続けたいと思います。

これからも、ご指導ご鞭撻のほどよろしく申し上げます。

山下 三鈴

## ■「松浦武四郎 追体験」から締めくくりは「10大ニュース」

特別展『龍馬と北の大地「蝦夷地へのまなざし－龍馬と幕末の志士」』と連動した関連展示“松浦武四郎 追体験”では、“北海道の名付け親”と言われている松浦武四郎に関する体験型の資料として、「北海道国郡検討図」の大判地図のレプリカと「一畳敷」と呼ばれる畳一畳分の書斎の原寸大模型を展示しました。



地図上には実際靴を脱いで上がり、武四郎の足跡をたどっていただくことが出来るようになっていました。間近でじっくり、じっくりと地図をご覧になる方、地図上で写真を撮られる方、階段を上がった中2階から俯瞰される方など、感じ方、楽しみ方、体験の仕方は様々です。

その中に、地図を何度も何度も見に来て下さる熱心なご婦人の方がいらして、来館時はほぼご友人の方とお見えになり、地図について興味深い説明をされているという事をスタッフから聞きました。ご本人にお会いできる機会があったので、お話を伺ったところ、Mさんは、「高知県の北海道移民史」について研究されている地元の方だと分かりました。出来るだけ多くの方に展示を見ていただきたいと、ご友人を誘ってはお来館くださっていたのです。「龍馬と北の大地」の第2部も楽しみにしています」と言われ、館を後にされました。

ご来館の皆様には、「様々な地域を旅した足跡をたどり、行く先々で何を見て何を感じたのか」タイトル通り「松浦武四郎 追体験」を色々な形で体験していただけたのではないかと思います。

なお、このたびの関連展示“松浦武四郎 追体験”は12月3日で終了しましたが、「北海道国郡検討図」の大判地図のレプリカは、好評につき、12月19日まで展示しました。

この後、記念館開館30周年の締めくくりとして海の見える・ぎゃらりいでは、1月初旬より「坂本龍馬記念館開館30周年 10大ニュースはこれだ！」展(仮題)を開催します。1991年11月15日の開館から2021年今年までの30年間に起こった記念館にまつわる様々な出来事の中から、職員が選び抜いた10のニュースを写真とパネルで展示します。どんなニュースが選ばれるのか、思いもかけないものをご覧いただけるのか、どうぞご期待ください。

中村 昌代

### 入館状況

2021年12月20日現在  
(1991年11月15日開館以来 30年36日)  
◆入館者数 4,404,114人  
■リニューアルオープン(2018年4月21日)以来 467,354人

### 編集後記

新年を迎えました。今年は干支でいうと壬寅(みずのえとら)です。60年でひと回りする干支、前回の壬寅は60年前の1962(昭和37)年、その前は120年前の1902(明治35)年です。そう考えると、昭和も遠い時代になりつつあります。

今年31歳になる龍馬記念館、人間でいえば気力も充実した壮年期の入口ですが、本格的な展示・収蔵施設を備えたばかりで、博物館としてはまだまだ若輩者です。今後も、厳しくも優しい目で見守ってくださいますよう、お願い申し上げます。(か)

館だより“飛騰”第120号(年4回発行)表紙題字:書家 沢田 明子氏  
〒781-0262 高知市浦戸城山830  
発行日 2022(令和4)年1月1日 TEL(088)841-0001 FAX(088)841-0015  
発行 公益財団法人高知県文化財団 http://www.ryoma-kinenkan.jp  
高知県立坂本龍馬記念館 「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00~17:00 年中無休  
入館料 一般500円(企画展開催時700円)  
高校生以下無料

高知県・高知市長寿手帳所持者・療育手帳・身体障害者手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者(1名)は無料



「飛騰」は郵送料のみのご負担でお届けいたします。購読希望の方は120円切手をご希望回数(4回分まで)お送りください。  
〒781-0262 高知市浦戸城山830 高知県立坂本龍馬記念館「飛騰」購読係 まで



私のテーマ

## 土居晴夫先生を囲んで



現代龍馬学会 理事

江上 英治

2013年4月2日、高知をスタートして神戸で一人加わり三名で名古屋へ行くこととなった。現代龍馬学会の会長であった故永国淳哉氏と理事の小島一男氏と私である。事の発端は、永国氏に「土居晴夫先生はご健在ですか？」と問うと、「神戸におるに知ららん。」ということ、「私は毎月京都へ出張していますのでお会いすることはできないでしょうか。」ということで連絡先を教えてくださいました。さっそく電話をしてみると娘さんが出て、父は今名古屋の病院にいますとのことだった。今度は教えてもらった電話番号で土居氏にかけてみると快く承諾を頂いた。4月2日早朝、永国氏と共に高知を出発。神戸で小島氏を拾い愛知の清須市にある満天星という高齢者施設へ向かった。道中永国氏は風邪をひいていて最悪のコンディションの中で、薄暗くなった夕刻に満天星にたどりついたのだった。

### 龍馬の美像を把握できた第一人者

途中到着時間をお知らせして施設のエレベーターで階を上がった。エレベーターのドアが開き一歩踏み出し右側を見ると、車椅子に座った土居晴夫氏の鋭い視線があった。90歳とは思えない眼力がある。氏は定年後、九州から北海道まで自身の血縁にあたる坂本龍馬の足跡を辿って行ったとのこと

だった。また、龍馬の近況を知る祖父母や両親の話も伝え聞いていたとのことで、なかなか興味深い話があった。龍馬に関する書籍販売はあまりにも多い。しかしながら身内しか知りえないことを考えると、近年では龍馬の実像を把握できた第一人者かと思われる。土居氏の話は、周りの近況、歳に伴う健康のことなどたわいもない話から始まった。そこで、私から「二代目彦三郎の妻は大和国吉野から来たんですよね」と切り出すと、おか阿とも言う姉娘と男子一人を伴い土佐へ落ちてきた！との話からだんだん熱を帯びてきて、それまで風邪で元気のなかった永国氏の声のボルテージが上がっていった。

### 末裔説

初代太郎五郎は1588年の長宗我部元親の地検帳にあるが、その前は全く不明だ。先祖書の記述には、太郎五郎が山城の国（京都府）から土佐に來たのは弘治・永祿のころ、1555年から69年とあるそうだ。明智氏の末裔説があるが、明智氏滅亡は天正10年（1582年）なので、息子彦三郎（先祖書記載には元龜2年1571年生まれとある。）もすでに12歳になっている。わたしが土居氏にお聞きしたかったのは其

の辺りであった。

彦三郎の妻おか阿は大和国吉野の住人須藤加賀守の女と記されているだけで出生は定かでない。父太郎五郎はもともと才谷の一農民であったなら、息子彦三郎の嫁（おか阿の妹）が戦乱を避けてわざわざ大和国から田舎才谷へやってきたことが、私には不自然に思える。そして、彦三郎の子三代目太郎左衛門の次男八兵衛が土佐の城下へ出て、1666年に借家で質屋・才谷屋を創業したのである。それから11年後には筋向いで酒造業を始め、さらに17年後の1694年には別棟で諸品売買の店を開業していくのである。

### 才谷屋の成り立ち

私も25歳の時京都で独立。その3年後に身内や知り合いの全く無い高知で呉服店を開業したが、人との信用や関わりには20〜30年の月日を要した。まず商売は知ってもらうことから始まるので、広報手段の少ない時代に信用を勝ち得るには、さらなる年月を要したかと思われる。そんな話の展開で2時間経過していた。才谷という在所は恵まれた土地とは言えない。才谷屋初代

八兵衛の開業資金！11年後の酒造業には広い土地と米麴職人が必要である。私は、才谷屋の成り立ち辺りの話に終始したが、土居先生は快く話してくださった。その時！風邪で元気の無かった永国氏のボルテージは上がったままで2時間以上経過したので、私の方から土居先生と永国先生にお礼を述べ満天星をあとにした。

翌日、三名は京都へ向かい、五条から鴨川沿いに上がり木屋町通り付近にある薩摩藩邸跡や長州藩邸跡、最後に土佐藩邸跡へと下って行った。私も40年来、月初めに京都にいるが、その年の桜は見事であった。永国先生は鮮やかな桜並木を見て、『こんな見事な桜は初めてじゃ！見納めになるかもしれないのう。』という言葉を残し、その年の秋に長い眠りにつかれた。



2013年4月2日 土居晴夫先生(中央)を囲んで(筆者右端)

# 大石神影流剣術から見た幕末の縁えにし



日本武道学会中四国支部会理事  
大石神影流剣術師範  
森本 邦生

柳河藩の大石神影流剣術は幕末の剣術を改革した新しい剣術流派であった。流祖の大石進種次（1798-1863）は他流試合でその名を知られ、7尺の身長にみあう5尺3寸の竹刀を用いたために試合に勝つためだけの流派であったと誤解されることも多い流派である。しかし大石家の『諸国門人姓名録』には、他藩の門人の姓名がきわめて多い。幕末、大石神影流を中心とした縁がどのように存在したのかをみてみたい。

## 大石神影流とは

流祖の大石進種次は祖父遊弮より大嶋流槍術と愛洲陰流剣術を学んだ。遊弮の師村上傳次左衛門は宝暦の初めころ柳河藩の剣術師範をめざした嶋原藩浪人黒木四郎太と試合し首尾よくことを収めており、柳河藩ではこの当時から他流試合を行っていたことがわかる。江戸で他流試合が盛んになったのは天保の改革以降のことである。愛洲陰流の試合稽

古に用いる防具は竹で作った面と革手袋、長さのきまった袋撓であった。身長7尺で大力であった種次は防具を改良し突技ができるように面金を鉄とし中央を盛り上げ、また打撃に耐えるよう胴を厚い革で作った。用いる刀や竹刀は身長力量に応じて変わるべきものとし、袋撓では長くできないため現在用いられている竹刀の原型を孟宗竹の節の多い根本で作りこれを用いた。身長が7尺であった種次は5尺3寸の竹刀を使った。

江戸の多くの流派が突技を用い始め、袋撓から長寸の竹刀へと変更していることから江戸の剣術界に大きな影響を与えたことがわかる。

大石進種次の名を全国的に有名にしたのは天保3年（1832）の出府である。当時江戸では勝海舟の又従兄弟である男谷精一郎が他流試合を行っていた。江戸の柳河藩邸の師範が男谷と試合をしたがはかばかしくなかったため大石進種次は男谷との試合のために出府を命じられた。この時の男谷との試合や他の剣術師範との試合内容に関する古文書はみつかっていないが、直心影流の藤川整斎の『長月物語』に「誠にこの人英雄豪傑とみへたり」とあ

り、大石進種次が出府したのは天保10年から翌11年にかけてのことである。水野忠邦の要請によった。このとき種次は記録に残るだけでも水野忠邦の前で日をつけて3日試合を行った。飢肥藩邸、人吉藩邸、大洲藩邸などでも試合を行い、各藩士に稽古をつけている。水野忠邦はひいきにしている心形刀流の伊庭軍兵衛秀業に大石進種次の技を習得させたかったらしく、伊庭は大石出府の直前に柳河藩邸で稽古する許可をえており、初めて大石が水野忠邦の前でその技を披露したときに2度も大石と試合している。また大石は伊庭軍兵衛方へも出向き稽古を行っている。

藩邸での試合では桃井に圧勝している。吉田東洋の「送大石種昌帰筑序」中の「藤堂侯聞君名欲試之、乃設場於江都之邸、大招致四方劍客、選其最精者二人、使與君角技、時臨場會觀者亡慮八諸侯、自是君名遍天下」という一文はこの試合を言う。

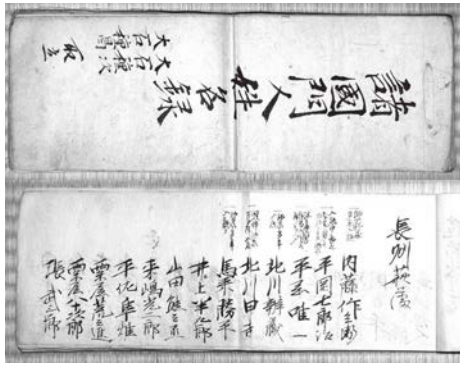
種昌は長州藩と土佐藩へも出向き指導を行った。長州藩では弘化2年に約1ヶ月間指導した。長州藩の記録である『密局日乗』には「其技も妙なる事進退之有様宛かも猿飛蝶舞の如し、また早り雄之者故用捨もなく敲きすへ候ゆへ藩士中の壮氏等も大畏縮之躰、耻へし耻へし実ニ萬夫不當之若者とハ斯人乃事ならんか」と記されている。土佐藩への指導は嘉永5年8月のことで約2ヶ月滞在した。

大石進父子によってその実力を知られた大石神影流は大石家に残った『諸国門人姓名録』に記された他藩からの入門者は404名にのぼった。また大石神影流の門に入らずその影響を受けた者は数多い。大石進種次は自ら大石神影流陰之巻に次のように記している。「十八歳の時二至りヨクヨク考ルニ刀ノ先尖ハ突筈ノモノナリ、胴ハ切ヘキノ処ナルニ、突ス胴切ナクテハ突筈之刀ニテ突ス切ヘキノ胴ヲ切ス大切ノ間合ワカリカ子ルナリ、コノ故ニ鉄面、腹巻合せ手内コシラへ諸手片手突胴切ノ業ヲ初タリ、其後江都ニ登リ右ノ業ヲ試ミルニ相合人々皆キフクシテ今ハ大日本國中ニ廣マリタリ、夫ヨリ突手胴切之手カスヲコシラへ大石神影流ト改ルナリ、シカル上ハ諸手片手突胴切ノ試合ヲ學者ハイヨイヨ吾コソ元祖タルヲ知ヘシ」つまり大石進種次が試合で始めた諸手突、片手突、胴切の技は流派を超えて取り入れられ、またその先進的な竹刀や面、胴なども他流派に取り入れられていたのである。

## 大石神影流と長州藩

長州藩の剣術は形稽古のみで試合稽古は行われていなかった。試合稽古導入のため天保10年に新陰流剣術師範の内藤作兵衛が

大石進種次のもとで剣術修業をすることとなった。内藤は大石進種次が江戸より帰国するまでは柳河藩の家川念流の各師範の指導を受け、その後大石進種次の指導を受けた。同じく新陰流師範である平岡弥三兵衛の子息2名も入門、片山流剣術師範である北側辨蔵とその子甲吉も入門している。来嶋又兵衛もこの頃に入門した。長州藩では流派名こそ大石神影流は名乗らなくとも新陰流の内藤作兵衛や同じく平岡弥三兵衛、片山流の北側辨蔵のもとでは大石神影流の稽古道具が用いられた試合稽古が行われた。内藤作兵衛の門人であった桂小五郎や高杉晋作などは試合稽古において大石進種次の孫弟子であったといっても過言ではない。



大石家蔵『諸國門人姓名録』(長州藩)

長州藩が神道無念流を学ぶようになったのは天保12年から15年にわたる長州藩の招聘による

柳河藩士の剣槍術の指導を柳河藩が断つてから後のことである。藩士の萩への派遣を断ると同時に江戸藩邸の師範による長州藩士への指導も断っている。

### 大石神影流と土佐藩

土佐藩は他流試合の導入に後れ、安政2年になってやっと他流試合が解禁された。この他流試合の解禁には大石神影流の土佐への導入と大石進種昌の招聘の影響が大きかったという。

土佐藩で初めて大石進種次に入門したのは中村の樋口真吉である。無外流を破門された樋口真吉は天保8年に九州へ廻国修行に出て熊本の新陰流和田傳兵衛に入門するもののすぐに辞して柳河藩に到り大石進種次に入門した。約1ヶ月で皆伝を受けその後大石神影流は土佐藩へと伝わることになった。

先述したように大石進種昌は嘉永5年に土佐へ赴く。樋口真吉の『壬子漫遊日記』に「与石山孫六氏同往九州て江都二出ント欲ス、(中略)山崎文三郎・桑原助馬両士亦同行、寺田忠二氏大石先生迎ノ為ニ出ル、遠近生文学ノ為ニ出ル、同行人数六人也」とあるように寺田忠次が招いている。このとき一刀流の石山孫六は大石進種次に入門し、以後「一刀流兼大石神影流」と名乗っている。

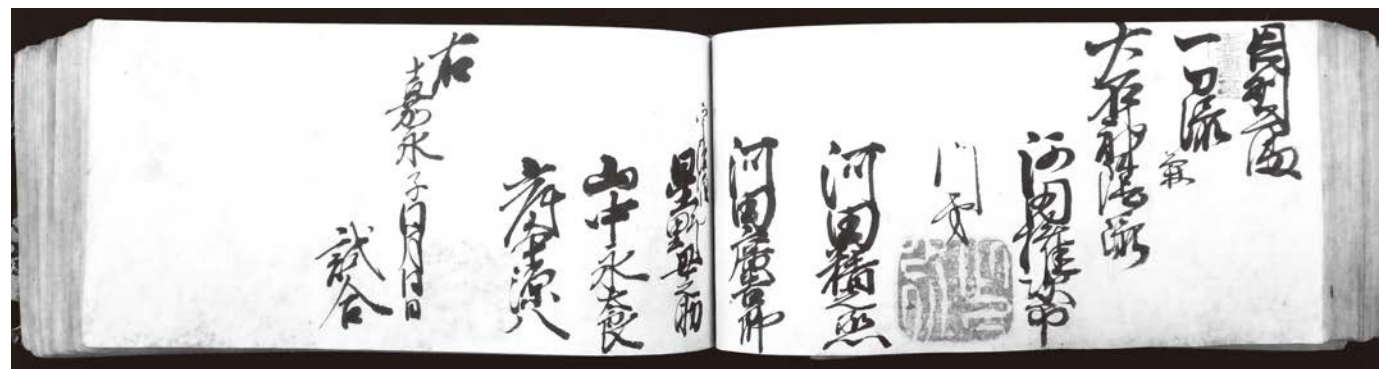
大石進種昌は土佐に約2ヶ月滞在し、この時に吉田東洋や後藤象二郎らが入門している。土佐藩の大石神影流の門人は60名で他藩の門人の中では一番多い。この滞在中に武市半平太とどのような接点があったかは不明であるが、武市は万延元年に廻国修行を行ったとき大石家では試合せず『劍家英名録』に「論武」とのみ記している。

### 河田佐久馬と大石神影流

河田佐久馬は代々鳥取藩の伏見留守居役を務める家に生まれた。家伝であった一刀流を学んだ後にはじめ長府の多賀虎雄に大石神影流を学び、文久2年大石進種昌在坂中に直接大石家門人となつている。訪ねてくる廻国修行者の英名録には「一刀流兼大石神影流」と記した。



大石家蔵『諸國門人姓名録』(土佐藩)



高鍋藩大石神影流師範石井寿吉の『英名録』

### 勝海舟と大石神影流

坂本龍馬の学問の師勝海舟の剣術の師は中津藩出身の島田虎之助である。島田は中津藩で一刀流を修め江戸で男谷精一郎に入門した。江戸に出るまでに九州を廻国修行しているがこの時大石進種次に入門しその名が『諸國石門人姓名録』にのこっている。また勝海舟の又従兄弟の男谷精一郎は天保3年に大石進種次と試合したのち、大石の突き技を取り入れた。柳河藩士笠間恭尚が天保7年に記した『他流試合口並問對』には「当時男谷先〔中略〕突も用ひらる。諸手突、片手突ともに有之」とある。男谷精一郎と大石進種次は天保3年の試合後には親交を持つようになっていた。

### おわりに

幕末の剣術に流派を問わず大きな変革を与えた大石神影流剣術は現在まで伝えられている。武道は行動の学問であり想像だけでは実態はわからない。興味をもたれた方はお訪ねください。

<https://kanoukan.jimdofree.com/>

# 敗者の歴史学

宮川 禎一

日本史の読者が歴史の勝者をあまり誉めず、敗者の方に心を寄せる気分を源義経の故事から「判官最良」と言う。歴史上の功績は武家社会を始めた源頼朝が抜群なのだが、大衆心理は兄の頼朝から疎まれ殺されることになった弟の義経が「可哀そう」なのである。頼朝は物語の主人公にはならないが、義経は「義経記」「勸進帳」などの物語や芝居でおおいに称揚されてきた。この流れが楠木正成や新田義貞や柴田勝家や明智光秀や真田幸村や大石内蔵助や徳川慶喜や松平容保や近藤勇や土方歳三などの「敗者の物語」になるのだ。

すなわち正しい歴史の評価などとは無関係に、後世の人々から「好まれる歴史上の人物」が居て、そこには「敗者の物語」があると云える。勝者は賢いから勝者であり、敗者は純粹善良だから敗者なのだという構造だ。勝者は勝つたのだから歴史的に正しいし、敗者は歴史的にも敗者であるという考え方は自然科学の進化論にある「適者生存」を援用したものだだろう。しかしそれは正反対の気持ちで後世の人間をして敗者を応援させることになり、それがいき過ぎれば「勝者こそ悪者だ。人間が「そう思う心理」にこそ意味がある。」

「歴史を客観的に観る」などは生身の人間には不可能なのだ(客観的なフリをすることはできるが)。人間は歴史上の人物の誰かをヒキキし、その人物に自分自身の心を投影する生き物なのである。



木曾義仲墓  
(滋賀県大津市義仲寺、この隣に松尾芭蕉の墓がある)

## “話してみるかよ”

### — 丸亀城と龍馬 —

讃岐龍馬会塩飽中社 事務局長  
野藤 等

丸亀城天守は、全国の現存12天守の一つで、最小である。石垣は、4重、合わせて高さ60mと全国一を誇る。平成30年、その一角が崩落して、現在修復工事が進行中である。

丸亀藩は、生駒、山崎、京極と3代が治めた。以下、地元の城郭研究者から聞いた話である。山崎家治が、築城の名人で再建。天守の礎の石垣の両端が少し反上がっているのは、幕府の許可を得ている。瀬戸内海を航行するキリシタンを監視する役目があったという。

文久元年、坂本龍馬が城下の矢野道場に剣術詮議に来た。司馬遼太郎『竜馬がゆく』の「萩へ」の中で、「城は蓬莱城といわれ、小さいがなかなか姿がいい。」と竜馬がつぶやいている。

本丸まで登ると、北に内海と塩飽諸島が眺められる。1250石、650人の人名による自治が認められた御用船方の島々が点在している。幕末、咸臨丸の水夫50名のうち35名が塩飽の水主(かこ)であった。咸臨丸は日本を離れる前、水夫が別れを惜しむために本島に寄港している。

少し西に目をやると佐柳島が見える。咸臨丸の水夫の一人で、後に亀山社中・海援隊の隊士になった佐柳高次の故郷である。

『追跡!坂本龍馬』(菊池明 PHP 研究所)によると、龍馬は、丸亀沖の瀬戸内海を9回も航行している。

三の丸の西側に、吉井勇の歌碑が立っている。初めて目にしたとき、すぐ龍馬を連想した。勇の祖父は吉井幸輔(友実)で、龍馬を大切にした薩摩藩士である。

龍馬亡き後、長岡謙吉率いる新海援隊が塩飽と小豆島を鎮撫した。本部は城下の遍照寺白蓮社に置かれた。その後、海援隊は解散。最近、山門右に石柱「海援隊解散の地」が建立された。

## コラム・龍馬のこと

### 「龍馬と道産子たちの夢海道」

北海道龍馬会 会長  
村田 拓一

北海道龍馬会の村田拓一でございます。私は、道産子と言われる札幌生まれ、札幌育ちの5代目です。そんな地元北海道を龍馬さんは、新しい日本の発展のための夢の島であると感じ、死の直前に至るまで、北海道開拓への情熱を失うことなく、4回も挫折しても挑戦しつづけた島だということです。その龍馬さんが、来たかった北海道に龍馬さんと同じ夢を持った人たちが根付き道産子となり、開拓し発展させてきました。私の先祖は明治13年頃に北海道に憧れ、熊本から島根の浜田経由で札幌(新琴似)に入植しました。産業発展のため新琴似大根を栽培・漬物加工して、販売を行ったり、教育、芸能、信仰が必要とのことで学校設立、新琴似歌舞伎の創設、寺の開基、神社の神主をしたりしていました。現在、その北海道の開拓という歴史や精神の継承と食の大切さを伝えるため小学校の授業として、新琴似大根を栽培した132年前と同じ場所で播種から収穫までを行っています。また、坂本家の方々も龍馬さんの夢を受け継ぐように渡道。北見、広尾、札幌、旭川、浦臼、釧路、函館などに足跡を残しました。今年の9月17日に、直寛さんに縁のある旭川で龍馬world IN 旭川が開催されます。皆さま、坂本家や道産子たちが、どのように夢の大地北海道を開拓および発展させてきたのかをこの龍馬worldに参加して、自分の目と耳で感じ、見つけ出してください。皆さま方がおいでになる事を心からお待ちしております。



ご先祖が設立に拘わった小学校での食育授業